

千賀一生

Chiga Kazuki

新装版

性パワーの

扉を開いて
タオの宇宙へ

タオの

暗号

Code of Tao

現代に新たに発見された
老子の教え「タオ・コード」、
中国でいまだ発禁となっている
その理由はなぜか？あなたを
「自己制限/支配システム」の
外へと導く覚醒の書！

DVD「タオの宇宙」を極める《身体原理編》との
同時発売コラボレーション！

『新装版 タオの暗号』に寄せて

私たちの命は、性の営みによって誕生する。この否定の余地のない事実のままに現実をとらえるのであれば、性ほど尊く神聖なものはないはずだ。体も心も、その営みによって誕生する。これは、人間だけでなく、あらゆる動物がそうだ。

命という命が性から誕生することを考えると、性というものは、宇宙という存在そのものもつ原理の表れであろうという帰結に至る。古代人が性を信仰の対象にしていたことは明らかであるが、現代人はそれを迷信として切り捨てる。もちろんその中には迷信もあっておかしくないが、そこには、人間という存在への深遠な直感を見ることが出来る。切り捨てるには、あまりにももったいない視点を、私たちは捨ててきたように思う。

中国少数民族に劣らない性への深い洞察は、私たちの祖先、縄文人もそうであった。いや、同じ古代でも、縄文ほど深い性への洞察はまず見当たらない。私たちはその子孫であり、私たちの中にはその記憶が刻まれているはずだ。性への認識は命の原点への認識であり、性の理解は、本質では宇宙の理解に通じてゆく。

本書の最初の出版にあたり、性エネルギーの昇華は、具体的にどのように行ったらよいのかという質問を多数いただいた。それに応じられる本を提供できたらと思ってきたが、そのためには本よりも映像で伝えられるDVDの方が適していると思い、本書の姉妹版のDVD『タオの宇宙を極める《身体原理編》』という形でそれに近づけたと思っている。

性エネルギーは、究極的には人間の幸不幸を決定付ける力と言っても過言ではない。その開花には、不可欠なポイントがあるが、人体の微妙な把握を文字で伝えるのは困難である。本書の姉妹版DVDは、豊富な図解と映像によって性エネルギーセンターに関わる人体の宇宙的原理を具体的、かつ詳細に解説している。あわせてご覧いただけたらと思う。

1 『新装版 タオの暗号』に寄せて

13 老子の暗号——ダブル・コード——**真実のTaο**が語る宇宙の法則と人類の理想郷を巡る究極の旅

Laozi&TaoCode 1

15 秘密を知る人物との出会い——仙人のような外観、明晰な思考力をもつM老人

Laozi&TaoCode 2

24 M老人の村——人類の記憶を呼び覚ます神話の世界

Laozi&TaoCode 3

31 老子二千五百年の秘密——性エネルギーを包含した太古の叡智

Laozi & TaoCode 4

実在するパラダイス——精霊と交流・交信をする人々

Laozi & TaoCode 5

明かされたTaoの真実——秘儀と哲学を重ね合わせた人間本来の生きる道^{ダオ}

Laozi & TaoCode 6

性なる宇宙——性の^{エクスタシー}至福感は宇宙本源の性が生命に表れる疑似体験

Laozi & TaoCode 7

性と人間社会——性が宇宙の本質からはずれ欲望へと変容する瞬間^{とき}

Laozi & TaoCode 8

すべてを決める性なる次元——神性か、欲望か、“恒久なる幸福の次元”に至る道^{ダオ}とは

Laozi&TaoCode 9

性エネルギーと聖なるSEX——ヤーマの身体的実践と「タオの幹」理論により完全なる常道へ

Laozi&TaoCode 10

深遠なる身体観——空間バランスによる人体の超法則を熟知した者たち

Laozi&TaoCode 11

Taoへのダンス——次元上昇の扉へ！ 万物一体感へと導かれた聖なる祭り

Laozi&TaoCode 12

愛に満たされて——地球上で最も正当に進化した社会システム

Laozi&TaoCode 13

開封されたタオ・コード——老子が説く太古の性と宇宙への超意識が人類を救う！

別れるとき——生命と魂の歓喜、限りない至福に包まれながら

老子書の秘儀（M老人秘伝による「老子」全訳）

- 一、究極のTao
- 二、すべての導き手
- 三、天地合一
- 四、形なき性
- 五、性から聖へ

追記（2011年4月11日）

現在の私とあの村

東日本大震災は何を語っているのか？

津波さえも恩恵であった私たちのあり方

「知足」とは何か？

空間を操る叡智

中心軸

古代中国の賢者、老子を
あなたはご存知だろうか？

もしも老子をご存知であるならば、
彼が語る冒頭の一章を

次のように訳したとしたら
耳を疑うことだろう

道可道非常道、名可名非常名。

無名天地之始、有名萬物之母。

故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼。

此兩者、同出而異名。

同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門。

(一章)

道の道とす可きは常の道に非ず、名の名とす可きは常の名に非ず。

無名は、天地の始めなり、有名は、万物の母なり。

故に常に無欲にして以て其の妙を觀、常に有欲にして以て其の徼を觀る。

此の兩者は、同じ出して名、異にす。

同じく之を玄と謂うも、玄の又た玄は、衆妙の門。

【訳】

私は今から性の秘密について語ろう。

かといって、

あなた方がよく行く、うつろいゆくセックスについて語りたいわけではない。

究極の性とは、この宇宙を生み出した、名前すらない本質だ。

あなた方の知るセックスは、その本質の擬似的表れにすぎない。

だから、情欲的次元を超えて、性なるものの本質を観るんだ。

あなた方が知る粗野な性の悦びを超えた、

はるかなる至福世界がその奥にはあるのだよ。

あなた方はその一時いつときのセックスにさえ不思議なほどの魅力を感じるというのに、そこに秘められた、その何倍もの深遠世界に、どうして気づこうとしないのか。

それこそが究極の性、すなわち、森羅万象を抜き超えた真の至福の領域なのだ。

（私はその究極エクスタシーの愛へと至る道をこれから語ろう）

老子書の前書きとして語られたこの一章が、

世界的に知られている訳とはまったく異なることに驚かれるかもしれない。

しかし、これは誤りではない。

老子書は、世によく知られるその詩文の裏に、

秘教的教えが二重写しで記述されている暗号の書であり、

その秘教は、2500年もの間、人々の目から封印され続けてきた。

今や西洋社会でも最もよく知られた東洋の賢者である老子であるが、

人々は表層の意味のみでTaoを理解してきたにすぎないのである。

私は、この老子が語る性とは何かを、

中国の奥地で教えられ、実体験した経験を持つ者である。

性とは、人間の幸不幸を決定的に決めてしまう力を握っているものであることを

現代人は知らない。

そのTaoの真実を、

老子書の解説と私の体験の告白によって、明らかにしてゆくことにしよう。

老子の暗号
—— 真実のTaoが語る宇宙の法則と人類の理想郷を巡る究極の旅

本文では、話の展開や風景描写などのT a oとは直接関係のない描写も含め、すべてはT a oをより深く認識するために必要な内容のみを記載している。あせることなく、T a oと無関係な描写ほど時間をかけてゆっくりと読んでいただきたい。私の体験の再現は、そうした中から生まれるからだ。



Laozi&TaoCode 1

秘密を知る人物との出会い

—— 仙人のような外観、明晰な思考力をもつM老人

今や西洋社会でも最もよく知られた東洋の賢者の一人である
この老子であるが、人々は表層の意味のみで
Tao（老子の説く道）を理解しているにすぎないのである。
彼は、何のためにそれを暗号化したのか。
そこにどんな秘密を封じ込めたのか。



それはまったく偶然の出会いであった。

中国雲南省の山奥の村で、私は思いがけない人物と出会ったのである。

彼との出会いは、私の人生上の視野を、それまでの何百倍にも拡大させるほどの衝撃をもたらしたのであった。

中国への旅は三回目で、当時学生であった私は、経費節約のため、毎回、船で日本から中国へ渡っていた。中国の古代に関心があり、中国古代哲学を専攻していた私は、中国の古い文化に惹かれていた。中国語の勉強には力を入れてきたが、日常会話程度である。それでも何とか、三回目の今回、求めていたような村に行けることになったのだ。

文明の手がほとんど入っていないというその村までは、前回の旅で知り合ったその村を一度だけ訪れたことがあるという中国人に同行してもらった。その友人と待ち合わせた中国南方のある町から山岳地帯の奥地にあるこの村までは、二日ばかりであった。

この雲南省南端の山脈地域は、隣接するミャンマー北部も含め、日本の本州の半分ほどの広域に二十を超えるという少数民族が暮らす彼らの天地であり、中国政府によって外国人未開放地域に指定されていると彼から聞かされた。私はさすがに不安とためらいを感じたが、大丈夫だという彼の言葉を信じて、進むことにした。

周囲に茶畑が延々と続く舗装のされていない道を車で四、五時間走り、さらに車には過

酷な山の道を、進める限界まで数時間走り、その日は車に泊まった。翌日、車では進めない山の中を、まだ薄暗い早朝から日が沈むまで私たちは歩き続けなければならなかった。しかし、この時はまだ、この遠い道のりの向こうにあのような出会いが待っているとは思ってもいなかったのである。

車を置き、私たちは山道を歩きはじめた。最初のうちは細道が続いたが、やがて道らしき道もなくなり、彼は山の中の道なき道を奥へ奥へと進んでゆく。私はその後についてゆくのがやっとであった。深い自然の中の独特の匂いがある。足元は平坦ではなかった。そうして二、三時間歩くうちに、生い茂る南国のジャングルのような森の景色となった。

ここは日本の沖縄よりも南に位置している地域だけあって、植物も中国のイメージとはほど遠い常夏とこなつの国を思わせる巨大な葉の植物が多い。日本の自然に慣れていた私には、植物の葉が異様に大きく感じられた。恐竜がいたような太古の自然は、こんなふうな木々が生い茂っていたのだらうと、そんなことを思いながらも、彼について行かなければならなかった。体に当たる大きな葉をかきわけるようにして進んでゆく感触は、原始の時代にもどったようで不思議な快感も感じたが、しだいに疲れてきた。

案内の彼は私ほどは疲れていない様子だった。心地よい疲れではあるが、それでも彼についてゆくのがきつくなってくる。こんなジャングルの中では、人が訪れないのは当然だ

ろう。五、六時間は歩き続けただろうか。思考の余力もないほどに疲れ、無心で足を運んでいたその時、美しい渓谷が目の前に広がった。はるか遠方に山々を臨む雄大な渓谷だ。下に広がる水を湛えた川も、見事なほど広大なスケールだ。彼は立ち止まり、私たちは休憩した。

突然目の前に広がったこの雄大な渓谷は、単に美しいというだけではない何かを感じさせた。日本で時間に追われる毎日を送って育った私は、自然というものは美しいものなのだという、きまりきった認識しか知らなかった。しかし、この渓谷は、日本にいた時とはまったく異質な時の流れというものを私に教えてくれた。この原始の森の奥深くでまず感じたのは、私が忘れていた偉大な時の存在だった。それは私を深く包み込む、はてしない何かの臨在を感じさせた。この感覚は、あの深い自然の中を歩き続けた数時間の中でわずかに甦^{よみがえ}ってきた私の中の原始的本能なのだろうか。

しかし、この母なる大自然に抱かれ、その私を感じた「何か」とともに暮らす森の人々に、私はこの後すぐに出会い運命にあったのである。

村まではこの渓谷から、さらに四時間以上は歩いただろう。

どうしてこんなジャングルの奥にと思うほどの所にその村はあった。案内人の彼はその村の村長さんと面識があり、私たちは村で一番大きな家に住む人のところに泊めていただ

いた。彼は、次の日同じ道を一人で帰った。

外部の者が訪れることなどほとんどないこの村は、食生活も自給自足であり、他の中国社会とは隔絶された独自の文化をもっていた。おそらく中国の古い時代の文化がそのままに維持されているものと思われる。あの母なる山々によって、あるいは人を寄せ付けない奥深いジャングルによって、この村の文化は昔のままに守られてきたのだろう。人々は誰もが素朴で善良であった。

この村に着いた次の日に、私はM老人と出会った。

M老人は、白い髭を長く伸ばした、まるで仙人のような外観の人だった。髪は長く、後ろで細長く結^ゆわえてあった。出会った瞬間、他の人たちとはどことなく違う印象を受けた。その目はやさしさに満ち、けれども、目と目が合う時、身の引き締まるような眼光を感じさせた。

「どこからこの村に来たのだね？」

とM老人は私に聞いた。

私は、

「中国の古い文化に出会いたくて日本から来ました」と答えた。

それ以後、私に関心をもったのか、M老人は私を泊めてくれた家にしばしば顔を見せるようになった。

私たちが知らない何かを、この人は知っている。そんな雰囲気をもいつも感じさせる人だった。

村人たち誰もから彼は尊敬されている様子だった。

しかし、夕方になると彼の姿は見ることはなかった。

こんな山奥の村からいなくなつて、いったいどこに帰るといふのだろう。彼は現実の人間には違いないが、私にとっては不思議な物語の登場人物のように感じられた。

この村に来て数日後のある日、彼は私に何かを決意するかのように言った。

「わしの村に来てみないかね？」

いったい、どういう意味なのだろうか。

この村以外に村があるのだろうか。私はその言葉が何を意味するのかわからないままに「はい」と答えた。

彼は「ついてきなさい」と言つたまま後ろを振り向きもせず無言で歩き出した。

M老人はこの時、八十二歳だった。しかし青年のような明晰な思考力をもつ人だった。背筋もまっすぐに伸びている。そんな彼の後ろ姿を見ながら、どうしてこんな若さを保て

るのだろうと思いついていった。いったい彼はどこに行くのだろう、と思いつながらも、私は無言のまま歩くしかなかった。

思ったより長い道のりを歩き、さらに深い山々に入っていた。クイツ、クイツと大きな声で鳴く鳥の声が森中から聞こえてくる。二時間は歩いたと思う。目的とする山へとようやく至ったようだ。山の中腹に、簡素なお堂のような小さな建物が見えたからだ。

入口には日本の神社の鳥居を横に長くしたような門があった。この門の中央に鳥の彫刻があるのが印象的だった。

一辺が五十メートルはあると思う広い中庭のような所を通り過ぎ、M老人は、古びて簡素なお堂のような建物の中へと入った。素人が作ったと思われるようなお堂であった。私は奥にある小さな部屋へと案内された。そこでM老人はその部屋にだいにしまい込まれてあった一冊の本を手にとった。活字の本ではなく、手書きの本だが非常に古びていた。「老子」と書かれていた。

「老子」とは中国古代の賢者であり、彼の書いた本の名前でもある。私は台湾で出版された中国語版の「老子」を大学の授業で使っていたのでよく知っていた。しかし、この「老子」は、半分以下の厚さしかなかったし、よくみると一般の「老子」とは章の順番も違っていた。

ご存知ない方のために「老子」についてここで少々解説しておこう。

中国古代の思想家としては日本では孔子が有名であり、論語で知られる孔子は、中国の歴史に最大の影響を及ぼした人物だ。しかし、中国には、この孔子とほぼ同じ年代の人物で、同じほどに多大な影響を及ぼした人物がいる。

孔子の思想が世の支配階級の人々に好まれたのに対し、彼の思想は世の底辺から広まった。孔子が人間社会における人の生き方を説いたのに対し、彼は人という枠を超えたより広大な視点から人間のあり方を求めた。彼こそが老子だ。

今日では彼の思想は西洋の知識人の間でも、T a oと呼ばれ、日本のZ e n（禅）とともに深く受け入れられている。

彼の思想はこの「道」^{T a o}という言葉に集約される。

大宇宙の流れに真に沿った生き方を、彼は「道」とよんだ。

古来中国では「道」という言葉が人間の生き方にたとえられてきた。しかし、彼はその道という言葉をも人間社会におけるそれから、宇宙大のそれへと拡大したことで知られる。

「人間の狭いはいの心を捨て、川の流れに沿って泳ぐ魚のように大自然の理法にかなった生き方をする時、真の幸福へと至ることができる」

そうした生き方が彼の言う「道」として知られている。

ところで、私が本書を書くと思った一つの目的は、このような世界的に知られる「老子」の解釈が、彼の言う「道」を決して語り尽くしてはいないことをM老人との出会いによって知ったからだ。もちろん、中国人や道教の人々でさえもその真実を知る者は皆無に等しい。

これを聞いて、すぐさまそれを信じる人はまずいかもしれないが、彼の言う「Tao」は、実は、性（性行為）を意味する暗号語なのだ。

今や西洋社会でも最もよく知られた東洋の賢者の一人であるこの老子であるが、人々は表層の意味のみでTao（老子の説く道）を理解しているにすぎないのである。

彼は、何のためにそれを暗号化したのか。そこにどんな秘密を封じ込めたのか。

私はその真実を、この村での以下のような体験によって知ったのである。



Laozi&TaoCode 2

M老人の村

—— 人類の記憶を呼び覚ます神話の世界

誰をとっても深い洞察力と物事の観察力をもっていた。
まるでテレパシーでも使っているかのように、
わずかな一挙一動で私の思っていることを見抜き、
過去の体験さえも探り当てる彼女たちの機敏な観察力は、
文明社会の老人たちとはまるで違っていた。



私はM老人に見せられた「老子」に興味をもったが、その日はそれだけで、私の「老子」についての知識を簡単に質問されただけであつた。

M老人が「村」と言つたのは、このお堂のことなのだろうか？

彼は心のふるさという意味で、このお堂のある場所を「村」と言つたのだろうか？

しかし、M老人はすぐにそのお堂を後にした。

ほとんどジャングルと言つていい森の中を二、三十分歩いたが、その途中、小さな滝で水遊びをしていた十歳前後の少女たち三人に出会つた。彼女たちは笑顔でM老人にあいさつをした。中国語ではない言葉であることに私は驚いた。私にも笑顔であいさつをしてくれたが言葉がわからないので、私は笑顔で返したただだった。この少女たちに私は強烈な印象を受けた。

彼女たちの内、二人は少数民族の着るような手作りの服を着ていた。赤系の鮮やかな美しい衣装が、まるでジャングルの中の色彩やかな鳥たちのように木々の緑と調和していた。その内の一人は、ワンピースの作りの服を着ていて、一番年上に見えた。子供でありながら、落ち着いた豊かな母性を感じさせる目が印象的であつた。まるで私を包み込むようにやさしい、何の束縛も知らないその目を見ると、逆に私自身の心がいかに自由でないかを感じずにはいられなかった。もう一人は一枚の布を腰巻きのように巻いていて、上半身は

裸だったが、髪は独特の結び方でおしゃれに結ってあった。彼女はメンラという名前であることを後で知った。お茶目で人なつこい感じの子であるが、同時に非常に知的な目をしていた。知能の高さを感じさせるクリツとした賢そうな目に私は引き付けられた。

もう一人は大きな木の葉を何枚も連ねるようにして作られた遊び心たっぷりのスカートをはいていた。その姿は原始的というよりも、大変おしゃれに私の目には見えた。髪は先の子とはまた違うこった結び方で結われていて、きれいな生花が髪に留められていた。まるで想像上の楽園の存在でもあるかのように彼女の姿はジャングルに溶け合っていた。顔も他の二人同様、極めて端正で清潔感があった。

そして何よりも彼女たちの豊かな表情に驚かされた。人間の顔は、その人の育った背景を一瞬で伝えるのだと、この時思った。楽しそうな無邪気な目の表情は、単にかわいいだけでなく、私をあらゆる束縛から解き放つかのようでさえあった。こんなに澄んだ目を私は見たことがあっただろうか。彼女たちの存在は、神話世界に紛れ込んだかのような錯覚に私を引き込んだ。

M老人から見せられた「老子」への私の興味は、この一瞬で消え去った。私にとって、この彼女たちの存在の方がはるかにインパクトがあったからである。

しかし、この出会いは、私の異文化体験の始まりに過ぎなかった。

それはまさに、私たちとは違う世界の存在を意味していたのである。彼女たちとわかれ、少し歩くと、彼女たちの村らしき地に近づいた。

やはり別の村があったのだ。

歩いてゆく道は細く、しかし、景観は広々としていて、遠くに山々が見える。

村がついに私の視界に入った。日本の登呂遺跡を少し大きくしたような家々がぼつりぼつりと点在している。その周囲には田畑が美しく広がる。まるで太古の時代にタイムトリップしたかのような錯覚に陥った。

先の村もたしかに私が求めていた通りの古き中国そのままの村であった。しかし、この村は先の村よりもはるかに古代を感じさせた。

実際に、生活様式は、日本の弥生か縄文とさほど変わらなそうな印象を受けた。

村に一歩足を踏み入れると同時に、不思議な懐かしさに私は包まれた。

それはうまきは表現できないが、時間が静止したかのような悠久の時間が満ちているとも言ったらいいたろうか。私個人の記憶を超えて、人類としての大きな記憶が、この村の風景を、かつて私は確かに見たと、そう感じさせるかのようで、それがたとえばようないやすらかさを伴って私を癒すのだ。

人口はわずか二百人足らずだろうと思われる。車も自転車もない村であることは先の村

と変わらないが、この村は靴もなく、人々は素足だった。

はるかな古代を思わせるこの村の空間とは対照的な村の人々の知的な顔立ちと美しさにも私は強い印象を受けた。こんな山奥の人々がどうしてかと思うほど、知的な顔立ちをしていた。

しばらく歩いて行き着いたのは、なんと、M老人の家だった。M老人はやはりこの村の人だったのだ！

質素な家だが、この村の中では一番大きいと思われる。中に入ると、奥さんが出てきて迎えてくれた。やはり美人であったが、ほほ笑んだときの目のやさしさが、慈眼とでも言いたくなるようであったのが印象的だった。五十歳はいいないように見えたが、後で年齢を知って驚いた。七十三歳なのだそうだ。

家の中は、日本と違って畳ではないのに、ここにもなぜか私は懐かしさを感じた。家の中にただよう土の香りや、土間の上に敷かれたクバの葉やそうした一つ一つが、なぜか懐かしい。

私はその日、M老人の家に泊めてもらうことになった。その日だけでなく、その後の数週間も、私は、M老人の家に泊めていただいた。

村の人々は、見慣れない私の存在を喜んで受け入れてくれた。

村の人々を知れば知るほど、私は私たちにはない自然な人間性に惹かれるようになっていった。男の人たちは無口だったが、無言のうちに深い思いやりを示す。それが、私の前ではなく私の知らないところでそうしていたという出来事に何度も出会った。年配の女性をよくしゃべる人が多いので、やさしさがわかりやすい。彼女たちの洞察力の深さには驚くばかりだった。誰をとっても深い洞察力と物事の観察力をもっていた。まるでテレビシ―でも使っているかのように、わずかな一挙一動で私の思っていることを見抜き、過去の体験さえも探り当てる彼女たちの機敏な観察力は、文明社会の老人たちとはまるで違っていた。人生体験の積み重ねられた人間としての深みを誰もが感じさせてくれる彼女たちは、まるで心のふるさとの母親像のようで、自分のすべてをあずけたい気がしてくる。すべてを癒してくれ、すべてをわかってくれる世界が彼女たちの懐ふところには感じられた。どの家でも、そうした性質をもつおばあちゃんたちが、家族の守り神的存在だった。このおばあちゃんたちの中には、文明社会の人たちにはない何か未知の世界が展開しているのだろうか。それは、きつと言葉で説明されてわかるようなものではなく、一緒に生活してゆく中でみえてくるのかもしれないと、小さな期待を私は抱いた。

文明化していない人たちがすべてこのような魅力をもつわけではない。何がこれほどの違いをもたらすのか。私の最大の関心はしだいにこの一つの疑問へと絞られていったので

ある。

この村では祭りが何度も行われ、まるで毎日が祭りのようだった。その祭りで、私はその答えに体ごと出会う衝撃的な体験をしたのだが、それについては、後で書こうと思う。